

ヒア・カムズ・ザ・サン

ケープカナベラルの夜風は晩秋だというのに生ぬるく、しかし不快感は感じられなかった。レジーナはフォンの灯りをたよりに適当な礎石を見つけると砂をはらって、海のほうを向いてすわった。ぼくも彼女とおなじように、少し離れた礎石に腰をかけた。

ここ数十年のめっちゃくちな気候変動と温室効果制御で、このあたりの海岸線はすっかり変わってしまった。いま、ぼくが腰かけているのも、かつてヴェルナー・フォン・ブラウンの時代に使われていた歴史的ななにかなのかもしれない。

カバンのなかから冷え切ったキューバサンド的ななにかを取り出すと、ぼくはセブンアップで流しこんだ。食べ損ねていた夕飯をこんなところで食べることになるなんて、思ってもみなかった。

フォンのバックライトを消すと、あたりは星明かりだけになった。暗がりにだんだん目が慣れてくる。海に向かってひらけた東の空には冬の星座が宝石のように輝き、南の地平すれすれにはヤシの木のあいだから、エリダヌス座の一等星アケルナルがちらりと顔をの

ぞかせている。星空だけはなにも変わらない。

オリオンの足もとの右側あたりの空を、レジーナがじつと見つめているのに気づく。彼女の視線の先にあるかすかな天体に、ぼくは心当たりがある。

「エリダニ40……あのあたりか」とぼくもその方角を見上げる。「エリダヌス座、グレース先生のお手製プラネタリウムにもあったっけ。——いや、さすがにマイナーすぎるか。サンフランシスコからはアケルナルは見えなかったし」

「いいえ、ちゃんと載ってたわ。一等星クイズでやったもの」と静かにレジーナがいう。確信のこもった口調だ。「あのとき、アビーに先を越されて悔しかったのよね。でも、そのあとの星雲クイズで挽回したわ」

「……ずいぶんよく覚えてるな」ぼくは変に感心する。彼女、物静かな印象をもってたけど、意外と負けず嫌いというか執念深いところがあるんだな。

彼女は中学のクラスメイトで、ぼくらはじつに二六年ぶりの再会だった。といっても、別にロマンチックな理由があるわけじゃない。ここ、旧ケネディ宇宙センターからの打上げを二週間後に控えた、ある宇宙ミッションにかんする会合の参加者リストのなかに、偶然、彼女の名前があったんだ。

向こうは、赤外線天文学の任期なしの教授。こっちは、つい半年前までバイオ系の怪しいベンチャーを渡り歩いてた貧乏研究員。タウメーバ特需で、ようやくまともなバイオテック企業のポストにありついたらばかりだ。しかし、専門分野があまりにちがうせいか、それとも会うなりグレース先生の思い出話で盛り上がったせいか、ふしぎとぼくらは十三歳の頃とおなじような感覚で話ができた。

ああ、ちがうんだ。隣の席の女子のノースリーブにどきどきしてたあの頃、とかそういうやつじゃない。さすがにそんな甘酸っぱい感覚は、すっかり過去のものになってしまった。

なんにだってなれる気がしてたあの頃。グレース先生が教えてくれる世界の秘密が楽しくてしょうがなかったあの頃。サンフランシスコが平和で温暖だったあの頃。

……うん、ロマンチックというよりむしろノスタルジックだ。

「……いよいよね」と彼女がいう。

「うん」ぼくは発射台のありそうなほうに目をこらしてみる。うんと遠くに、照明に照らされた鉄塔のようなものがいくつか見えるけど、どれがそうなのかは判然としない。

早朝から深夜までつづくミーティングでへとへとになっていたぼくを、なかば強引にこ

の海岸に連れてきたのはレジーナのほうだった。話しておきたいことがある、と彼女はいつていた。でも、心当たりがまるでない。

いっこうに切り出してこない彼女を横目で気にしながら、ほぼ空っぽになったセブンアップの缶をあおる。水滴しか落ちてこない。まあ、たまにはこんな星空の下のピクニックも悪くはないかな。

* * *

ぼくらが八年生だったとき、世界は一変した。正直、それより前がどんな世界だったのか、あまり覚えていない。

太陽が暗くなった。太陽から金星に伸びるペトロヴァ・ラインとアストロファージが見され——タウ・セチの有人探査計画、プロジェクト・ヘイル・メアリーが立ち上がった。どういう経緯かは知らないけど、中学校でぼくらに科学を教えていたグレース先生が、〈ヘイル・メアリー〉の乗組員クルーに選ばれてしまった。困惑していた先生の顔を、いまでも覚えている。しかも往復二六年、クルーは片道旅行という特攻ミッションだったんだ——地球に帰れるのはビートルズと名づけられた四機の無人プローブだけで、先生たちは帰れ

ない。中学生のぼくらにはただの理不尽にしか思えなかった。

結局ぼくらとはろくに話もできないまま、グレース先生は十二光年のかなたに旅立ってしまった。

とはいえ人類も、二六年間ただ手をこまぬいていたわけじゃない。異常気象や疫病、軍事衝突に大半のリソースを割かれながらも、人類はけっこうよくやったと思う。半数が死ぬという悲観的な予想に反し、現状ではなんとか八割程度の人口を維持できている。アストロファージのばかばかしいほどのエネルギー効率を利用することで、最終的な食料の備蓄が予想より上振れしたからだ。

ただしそれは、多くの犠牲や悲劇の上に成り立ったぎりぎりの奇跡だ。思い出したくない話も多い。一面の穀物畑はもう、北米大陸には存在しないだろうな。オーガニックな合成でない農作物には、ホールフーズ・マーケットでも目玉が飛び出るような値札がついている。ぼくみたいな安月給はウォルマートの代替食材が唯一の選択肢だ。まあ、ジャガイモだけで全人類が食いつないだ一五年前に比べたら全然ましだけど――

ふと、昼間見かけた、レジーナのジャケットについていたバッジを思い出した。

抽象化されたライ麦の穂の意匠。

〈コンソーシウム〉のバッジだ、と見るなりすぐに気づいた。人類の希望が託されたロゴ。「レジーナ、そういえばきみは」とぼくは彼女にたずねる。「もしかして、大学のほかに〈コンソーシウム〉にも所属してるのか?」

「ええ。ペトロヴァ光観測衛星にかかわってる」とレジーナがこたえる。

うーん、ぼくは赤外線天文学は完全に素人だ。まあ、そういう衛星があるんだろう。「……ああ、なるほど。すごそうだね」

「地球の公転軌道上に一二〇度の間隔で配置されている、三基の赤外線観測衛星のことね」と彼女は補足する。「〈リー・ジェ〉、〈オリーシャ〉、そして〈ライランド〉っていえばわかるかしら?」

ああ、それなら聞いたことが——いや、何度も聞いた。あの日、ネット中継のリポーターが、うわずつた声でその名前を連呼していた——

ワオ。

「オーケイ……思い出した。思い出したぞ」とぼくはいう。「ビー・トルズを発見したあの衛星か!」

「そのとおり。こんなご時世に天文学を続けてこられたのも、このプロジェクトのおか

げ」と彼女はこたえる。「もつとも、ここ数年は研究どころじゃなかったけどね」

* * *

そうだった。そもそも〈コンソーシアム〉は、そのために設立されたんだっけ——ぼくは記憶をたぐり寄せる。

太陽系にもどってくるビートルズを確実に捕捉するため、かのエヴァ・ストラットをはじめとするペトロヴァ・タイガーチームがふたたび集結した。正式名称は忘れたけど、みんな〈コンソーシアム〉と呼んでいる。

宇宙機関が解体され、国家さえ統廃合される混乱のなかで、かれらは人と技術の散逸を可能な限り防いだ。壮絶ともいえる捨て身の努力により打ち上げられた三基の衛星は、財源確保のためにあえて〈リー||ジエ〉、〈オリーシャ〉、〈ライランド〉と名づけられ、タウ・セチの方向を二四時間見張りつづけた。帰ってくるビートルズが逆噴射するペトロヴァ光をとらえてやろうって算段だ。

そうしてついに、二六年目がやってきたんだ。

そこから先は、報道されているとおりだ。

最初にとらえられたのは、光点のほうだった。分光データには、はっきりとペトロヴァ光の特異なスペクトルが写っていた。さらなる精密観測により、ひとかたまりに見えた光点は、三つの点の集まりだとわかった。

三機だ！ 三機のビートルズが、けなげにもどうにかこうにか太陽系にもどってきたんだ！ 四分の三。上出来だ。

速度プロフィールから推定された機体質量はなぜか、設計値よりわずかに大きかった。このときはまだ、謎の偏差だと誰もが思ってたんだよな。

十数日後、深宇宙^Dネットワーク^Nの老朽化した巨大パラボラアンテナが、ビートルズからバースト的に送信されてくるストレージデータをとらえはじめた。

たちまち全人類が、上を下への大騒ぎとなった。混迷をきわめた世界情勢も完全に吹っ飛んでしまった。

人類には、隣人がいた。それも、たったの十数年でいけるところに。

しかも、最初にかれらと友だちになったのは、われらがグレース先生なんだ。

そんなことって、ある？ 一三歳のぼくが知ったら、いったいどんな顔をするだろうか。

信じられない話だけど、グレース先生はタウ・セチで異星種属のエンジニアとぼったり出会ってすっかり意気投合して、ついに解決策を共同で見つけ出したらしい。

ビートルズからは、先生が保存したありとあらゆるデータが次々に送られてきた。ビデオ・レター形式の経緯説明にはじまり、日々の日誌、エリディアンという驚異の隣人の生態や文化、キセノナイトという驚異の物質の物性や加工方法、タウメーバという驚異の……オーケイ、キリがないな。ともかく、たっぷり五テラバイト分の「タウペディア」がそこにあつたってわけだ。

* * *

「すごいな。あのビートルズの発見の現場に立ち会ってたなんて」当時の全世界的なお祭り騒ぎを思い出しながら、ぼくはいう。

「そうね。毎日、新しい発見があつた」とレジーナはいう。「でも、あなただって、タウ

メーバ・フィーバーに突然放り込まれたんでしよう？」

「まあね。おかげでぼくも今の会社と呼んでもらえたから、感謝しなきゃな」

前もってビートルズの全データを電波で受け取った人類は、とんでもないお土産の存在を知ってあわてた。タウメーバのミニ農場だ。ミニ農場は地球―月圏から充分離れたところで、そつと回収された。タウメーバが人類にとつて致死性ではなさそうだとはわかってたし、もはや惑星^{プラネタリープロテクション}検疫なんてあつてないようなものだけど、やっぱり地球にやつらを野放しにしたくはないからね。これは、科学というよりは、気持ちの問題だ。

そうやってはるばる旅をしてきたタウメーバたちの子孫を、毎日ぼくは牧羊犬よろしく追い回してすごしている。ぼくが働いているのは、タウメーバ農場の大規模化事業に飛びついたスタートアップ企業だ。流浪のはみ出し研究者だったぼくになぜ声がかかったのか、さっぱりわからない。グレース先生の論文を、世界でいちばん読み込んだ自負だけはあるけど。

数カ月前からは金星へのタウメーバの制御播種も開始されていて、ぼくもやることにさらに増えた。

「グイエロー・サブマリナーの調子はどう？」

金星周回軌道に投入されたタウメーバ播種船の愛称だ。金色のサーマルブランケットで

覆われた巨大なタウメーバ・タンクは、たしかに潜水艦っぽく見える。

「いまのところ、効果は抜群だよ」とぼくは得意げにこたえる。「なにしろアストロファージの『巣』を根こそぎたたいてるからね！ 害虫の駆除剤みたいなものだ」

「さすがね。こちらの観測でも、ペトロヴァ・ラインはすっかり暗くなってるわ。太陽の光度も九七パーセントまで回復してる」

地球環境や世界情勢が落ち着くには、まだあと何十年もかかるだろう。でもぼくは、人類がなんとかここまで来たことを素直に喜びたいと思った。

「ワオ。最高のニュースだ」とぼくはいう。

「ええ」とレジーナもこたえる。すごい仕事をしているのに、やけに淡々としている。

うーん、ぼくは彼女の言いたいことに近づけているんだろうか？ 星明かりだけでは、彼女の表情も意図もよく読み取れない。だけど、ぼくらの共通体験は科学だ。科学がぼくを核心に導いてくれる、そんな根拠ない予感をぼくはなぜか彼女の口調に感じた。

* * *

「ドップラー効果って習ったじゃない？ 八年生るときだったかしら」珍しく、レジーナ

のほうから話題を振ってきた。

ぼくらはとりとめもない会話をつづけていた。夜の闇は深くなっている。潮の匂いも少し濃くなった気がする。いつのまにかアケルナルは地平線に隠れ、冬の大三角も西のほうに傾きつつあった。

「覚えてるさ。グレース先生、科学博物館エクスプローラトリウムの校外学習のとき、ダウンタウンのパトカーのサイレンを題材にして説明してくれたんだったな」

あの授業を受けてから、怖かった夜中の遠いサイレンがむしろ楽しくなったのを、ぼくは思い出した。

「ええ。サイレンが近づくときは音が高く聞こえ、遠ざかるときは低く聞こえる」

「そうだな。それが、どうしたんだ？」

「ヘリー・ジェ」のことなんだけど」彼女は唐突に、ペトロヴァ光観測衛星の話をはじめた。「ビートルズが帰ってきてからは、太陽系のペトロヴァ・ライン観測用に転用していたのよね。だけど、ちょうど去年の今頃だったかしら、ふと思いついたの。久しぶりにタウ・セチの方向に向けてみようかなって」

「タウ・セチのペトロヴァ・ラインを見るために？」

「さすがにそれは無理」と彼女はいった。「星系全体が一ピクセルに収まってしまおうし、

実際タウ・セチの観測結果は、なにも変わらなかった。……ところがタウ・セチから数分角のところに、光点が写ったのよ。画像解析A Iがようやく検出できるくらいの、かすかな光点が」

天文学の話をしたところで、ぼくは完全に専門外だ。ぼくは眉をひそめた。「光点だって？ ビートルズを観測していた頃にはなかったのか？」

「ええ、過去のデータをぜんぶ探してみただけで、そんな光点はなかった。わたしたちが目を離していた数カ月のすきに生まれたことになる」

「遠くの銀河の超新星という可能性は？」 誰でも思いつきそうな、まぬけな質問をする。

「ありえない」思ったとおり、即座に彼女は否定した。「だって、ペトロヴァ・スコープよ。単色のペトロヴァ光だけを抽出するように設計されてるもの。超新星のスペクトルは単色ではないから自動的に除外される」

「なるほど」ぼくは肩をすくめた。

でも、それならいったい、なんだっていうんだ？ ぼくに当てさせたいのか？ それとも——なにかをためらっている？

しばらく沈黙がつづいた。

「オーケイ、降参だよ、レジーナ」とぼくはいった。

彼女のため息が聞こえた。「まだわからない?」

「そういわれても、ぼくは天文学は素人だよ」

「天文学の問題じゃないわ。工学よ」

「え?」

「あれほどのエネルギー量と単色の赤外スペクトルは、自然現象ではありえない」彼女はつづける。「あきらかに、大量のアストロファージをエネルギーに転換したときにのみ出る人工的な光よ」

人工的——だって?

待ってくれ。

「まさか」ぼくは呻いた。

レジーナ、ひよつとして。きみがいいたいのは。

「もしかして……〈ヘイル・メアリー〉のエンジンの光が太陽系から見えた……?」

「そういうこと」彼女の返事は素っ気なかった。

ワオ。なんてことだ! 信じられない。〈ヘイル・メアリー〉が光学的に見えただっ

て?!

そんなニュース、聞いたことないぞ。

「うわあ」ぼくは頭をかかえる。「だって、一二光年先だよ?!」

「ここ十年のペトロヴァ分光学の発展をご存じない?」

オーケイ……そうだった。あの頃の人類は生き残るために必死で、ペトロヴァ光オタクみたいになっていったんだ。絶対にビートルズをとらえようと、なけなしのリソースを全部、ペトロヴァ光の検知技術につき込んだんだ。そして、そのクレイジーな技術の先鋒にいたのが、まさに彼女なんだった。

「それに、フル・スラスト時のスピン・ドライヴから出る赤外放射のエネルギー量は、太陽表面を数桁は凌駕するわ」彼女はつづける。

「うへえ」とぼくは呻いた。「うっかり当たったら一瞬で蒸発しそうだ」

太陽より明るいなら、見えてもおかしくない気がしてきた。

レジーナは畳み掛けてくる。「へイル・メアリー」のスピン・ドライヴの幅はたかだか十数メートルだけど、ペトロヴァ光に特化した分光機能と補償光学系を持つ「リー||ジエ」なら、原理的に検知可能だという計算結果が出てる。系外惑星の直接観測にくらべたらずっと楽」

ぼくの脳味噌はキャパオーバーで煙を噴きそうだ。どうどう、落ち着け脳味噌。まだそ

うと決まったわけじゃない。たとえば——ペトロヴァ光を出すのは〈ヘイル・メアリー〉だけとはかぎらないんじゃないか？

「ちょっと待った。エリディアン側の船のエンジンの光っている可能性は？」とぼくはたずねた。

「それは考えた。でもかすかな光度変化を見ると、きっかり四秒ジャストのサイクルで出力が制御されているように見えたの。人類とは異なる時間単位を持ち、六進法を使う種属がつくったエンジンが、秒単位で動いているとは考えにくい。あれはやっぱり人類がつくったものだ、とわたしは結論づけた」

「うーん……理屈は合うね」レジーナの優秀さに、ぼくは舌をまいた。

ふと、八年生の科学の授業を思い出した。実験中だけ盛り上がるほかの生徒たちとはちがって、レジーナは実験後の雑多なデータを粘り強く解析するのが得意だった。解析結果をことさら自己主張しないところも、いまと変わらなかった。

「きみの発見はすごいな」とぼくは感心する。だが同時に、ぼくの勘が告げている。

たぶん、彼女の話はまだ核心にたどりついていない。彼女がほんとうに伝えようとしてるのは、きつとその先だ。

きつと、ドップラー効果の話は、まだ終わっていないんだ。

「だけど、その」ぼくは口ごもった。「ペトロヴァ・スコープで光が見えたっていうことは……」

ビートルズ帰還の全世界的な祝祭から約半年後、〈コンソーシアム〉から唐突に発表されたニュースを、ぼくは思い出していた。全人類に衝撃を与えたその緊急報道は、たしか今年の二月だった。

レジーナの観測は、それより数カ月も前ってことになる。

「もしかして、きみは……世界ではじめて気づいてしまったんじゃないのか。〈ヘイル・メアリー〉のペトロヴァ光が」

恐る恐る、彼女にたずねる。ぼくは闇夜に感謝する。もし彼女の表情が見えていたら、ぼくはこの質問を彼女にできただろうか？

「——赤方偏移してること」

少し間を置いて、「……正解よ」と静かにいうレジーナの声がきこえた。

光ってやつはじつに雄弁なものだ。残酷なまでに。

波の発生源が遠ざかるときには波長が長くなるんだ、ほら、パトカーのサイレンが低くなっただろう？ ——グレース先生の快活な説明を思い出す。光の波でいうと、赤い側に

ズれる。それが赤方偏移だ。

レジーナによると、〈ヘイル・メアリー〉の噴射光に赤方偏移が見られたという。これが意味するところはひとつしかない。

グレース先生を乗せた〈ヘイル・メアリー〉は——地球から遠ざかっている。

いまとなつては誰もが知る事実だけど、あの当時、それに気づいていた人は皆無だった。なにしろ、ビートルズに保存されていたグレース先生の日誌には、こう書かれてたんだ。燃料が手に入ったから、「地球に帰れる」って！

全人類が、この記述に色めき立った。

先生の日誌は、異星のエンジニア「ロッキー」と別れたあとのビートルズ発進準備の記述で終わっていた。だからつきり先生はビートルズを先に行かせて、あとからゆっくり帰ってくるんだろう、とぼくは思い込んでいた。ぼくだけじゃない。〈コンソーシアム〉でさえ、当時はそう推測していたんだ。なにしろ船は満身創痍だし、一刻も早くタウメーバをぼくらに手渡すためにビートルズを切り離して先に五〇〇Gで飛ばしてくれたんだろうというのが、かれらの解釈だった。

だからぼくらは、ビートルズだけが太陽系にもどってきたことに、なんの疑問も持たな

かった。一・五Gで加減速すれば、〈ヘイル・メアリー〉は来年の春には帰ってくる。それが〈コンソーシアム〉の計算結果だった。

人類は完全に浮かっていた。

今年二月の報道で、グレース先生の心変わりが明るみに出るまでは。

でも、それより数カ月も前に、彼女は見てしまったんだ。

先生が遠ざかっていく決定的な証拠を。ぼくらの絶望を。おそらく人類ではじめて。直接、その目で。

いったいどれほどのショックを、彼女は受けたんだろうか。

* * *

ぼくの心配をよそに、レジーナは淡々と話しつつづける。「もつとも、遠ざかっているといても、太陽系からみると〈ヘイル・メアリー〉の進行方向は約八六度傾いている。ほぼ真横に進んでることになるわ」

「真横？　じゃあ噴射光もほとんど見えないし、ドップラー効果も出ないんじゃない

か？」

「ええ、パトカーのような遅い物体ならね。でも光速 c に近づくと、船尾側がこちらから見えるようになる。テレル回転^{テレル回転}って知ってるかしら？」

むしろ彼女は、さっきより饒舌^{じょうぜつ}なくらいだ。特にショックは受けなかったのかもしれない。科学者らしいドライさだ。

「いや、聞いたこともないな」とぼくは正直にこたえる。

「速度が $0.9c$ くらいになると、船尾をこちらに向けたのとはぼおなじように見えるの。それに、横方向の相対論的ドップラー効果も無視できなくなってくる」

「そんなものがあるのか」相対論の話を聞くといつも、なにかだまされているような気分になる。「……あれ、待てよ。ペトロヴァ周波数の光以外は写らないって言ってなかったっけ？ 赤方偏移した光でも検出できるのか？」

「それは織り込み済みよ。ヘリー^{ヘリー}・ジェ^{ジェ}のペトロヴァ・スコープは、検出波長域を微調整できるようになってるの」とレジーナはこたえた。「だって、ビートルズの噴射光もドップラー効果の影響を受けるわけだから」

「なるほど、そりゃそうか」

レジーナの論理は一分の隙もない。

「もつとも限界はあるわ。いまはもう船の加速が進んで、ペトロヴァ・スコープの観測可能波長域を超えてしまった。おそらく来年には、宇宙マイクロ波背景放射^Bに埋もれてしまうでしょうね」

「去年だったからぎりぎり気づけたってことか……。きみは強運の持ち主だな」ぼくは感嘆した。「いったいどういう経緯で？」

「いちばん最初は、ペトロヴァ光よりも短い波長、近赤外光を検出しようとしてたの。でも何も写らなかった——だからトラブルシュートのために、いろんな波長で撮ってみた。そうしたら逆に長い波長、遠赤外で撮った画像に、たまたま光点が写ったってわけ」と彼女は自嘲気味にいった。「笑っちゃうわ。写らなくて当然よね」

笑っちゃうわって、どういうことだ？ ……いや、それよりも、なにか引かかる。「短い波長……？」

近づいてくる物体が発する波の波長は短くなる——ふたたび、グレース先生の声が脳裏にこだまする。光なら、青い側にズレる。

「ああ……青方偏移、ってことか」とぼくはいう。「〈ヘイル・メアリー〉が近づいてくると想定してたのか……」

「ええ。ほんと、ばかみたい」彼女はどこか悔しさをにじませた口調で、ぼくの推測をふ

たたび肯定した。

ぼくは言葉に詰まる。

レジーナは気まぐれに〈リー＝ジエ〉をタウ・セチに向けたわけじゃない。完全に最初から〈ヘイル・メアリー〉の撮像を狙って、用意周到に準備していたんだ。

船がこちら側に向かっている——先生がもどってくる——と期待して、その速度まで考慮して。

「ばかなものか。あの頃は世界中のだけれど、船が帰ってくると思っていた。あの報道より前に、それに気づいたってだけですごいよ」とぼくはいう。

「ありがとう。そうね、運がよかったんだと思ってる」

ちがう。強運のおかげじゃない。彼女の慧眼以外のなにものでもない。

「ビートルズのあとを追いかけてきているなら、もう減速フェーズの光が見えていいはずなのよ」と彼女はいった。「タウ・セチとたまたま重なっていたとしても、ペトロヴァ光観測衛星の年周視差があれば三基とも見えないわけではないはず。なのに、青方偏移した光は写らなかった。——周囲はみんな、〈ヘイル・メアリー〉に最悪の事態が起こったのだ

ろうと解釈したわ。もともとそう、いう、ミッションだったのだから、氣落ちするなって」彼女の口調からは静かな怒りが伝わってきた。

「そんな」ひどいことをいうやつらがいるものだ。

「ありえないと思った」

「だよな」へへイル・メアリー」の生存を微塵も疑わなかった彼女の信念に、ぼくは心のなかで喝采を送った。

「絶対に見つけてやると誓ったわ。退役したストラットに直接かけあって、こっそり観測機会を割り当ててもらった。ぜんぶの波長を試してみたら、遠赤外画像に、赤方偏移した光点が写った」彼女はだんだん早口になってきた。「まさかと思ったわ。設定を間違えたのだろうと思った。でも何回撮像しなおしても、結果は変わらなかった。だから必死に探したの。なにかほかに見落としがないか。——で、昨年末にようやく見つけたのが、例のあのメモ」

「あのメモって——まさか」

さりとすごいことを言われた氣がする。

「もしかしてグレース先生の——」ぼくは絶句する。

「そう。緊急プレスリリースで公表されたあれね」

今年の二月、全世界が騒然となった隠しファイル。通称、グレース・メモ。〃タウペディア〃全データのなかで、タイムスタンプが最新のテキストファイルだ。ぼくらは真実をこのとき知った。

急いで書かれたらしいそのテキストファイルには、たったの数行、グレース先生が〃友人〃を助けるために急遽エリダニ40星系に向かうこと、地球にはもどらないことにしたが心配しないでほしい、というようなことが、彼なりのいつものユーモアをもつて簡潔に記されていた。ぼくもいまだに全文をそらでいえると思うし、〈コンソーシアム〉の記者会見でそれを読み上げたストラットの思い詰めたような表情が今でも忘れられない。

「あれを見つけたのも、きみなの?!」驚きすぎて、感覚が麻痺してきた気がする。

「ええ。光点や赤方偏移の件は結局公表していないから、あのメモだけが世間的には唯一の物証ということになるわ」

「ワオ……まさにワオだな」ぼくはうなった。

「これも運がよかっただけ」と彼女はいった。「赤方偏移のことがなかったら、いまでも

メモに気づいていなかったかもしれない。なにしろファイル名が「新規テキストドキュメント・txt」だったし」

「うわあ。それはひどいな。ぼくなら確実に見落とすよ」

「しかも『タウペディア』が入ったRAIDアレイとは別の、USBメモリの中にね。ビートルの内壁に緩衝材ごとダクトテープでぐるぐる巻きに固定されてて、『ここを見ろ!』ってペンで書いてあった」

「物理的に搭載されてたの?!

「ええ。電気的には切り離されてた。だからビートルズの送信データには含まれてなくて、ずっと見落とされていた」

「……ワオ」

なんてことだ。

彼女がそれを見つけてくれなかったら、ぼくらはいまでものんきに「ヘイル・メアリー」の帰還を待ち続けていたかもしれないってことか。考えるだに恐ろしい。

全人類はいますぐ、彼女の緻密さと執念深さに感謝しなくちゃならない。

でも、どういうわけかグレース・メモの報道発表には、レジーナの名前は出てなかったと思う。あくまで「コンソーシアム」としてのプレスリリースだったはずだ。「リー」ジ

エ」のデータにいたっては赤方偏移どころか、ペトロヴァ光が見えたことすら公表されていない。

「いやはや、すごいなんてもんじゃない。とんでもないよ。きみの成果は正当に評価されるべきだ。もっとアピールしたっていいんじゃないかな。ひどいことをいったやつらの鼻もあかせるだろう?」

レジーナはしばらくだまっていた。

「ぼくからも〈コンソーシアム〉にひとこと——」

彼女の小さなため息が聞こえた。「ありがとう——でも、いいの」

「……レジーナ?」

「あれを読んで、わたしがどんなに狼狽したか——あ、あなたならわかるでしょう? だって、ほかの動画や日誌では、これから帰るっていつてたのよ!」

彼女の口調がやや冷静さを失いつつあるのに、ぼくは気づいてしまった。

「先生はいつてたわ。ロッキーから燃料を分けてもらえることになったんだ、って。ほんとうにいいやつだって。これなら地球にもどれそうだから、待っててくれて」

「ああ……」ぼくはばかだ。無粋だった。

「サンフランシスコの海と山と空と坂道が恋しいって。いつかもう一度サリーズ・ダイ

ナーのツーエッグコンボをオーバーミディアムで、奮発してパンケーキもつけるんだって」

ぼくは拳を強く握りしめる。彼女の絞り出すような言葉を、だまって聞くことしかできない。

「授業、途中で抜けてきてしまったから、もう一度ちゃんとやらないとなつて。最後はとっておきのタウ・セチ早押しクイズをやるから、準備しておけよ……！」

* * *

そうだ。ほんとうに、レジーナのいうとおりだ。

退屈な中学校生活のなかで、いちばん楽しかったのがグレース先生の科学の授業だった。一三歳という多感な時期に、先生の授業とその後の顛末を間近で見ていたぼくらの人生が、影響を受けないわけがない。

先生は知らないだろうけど、あのクラスから科学^S技術^Tの分野に進んだやつは、ほんとうにたくさんいるんだ。レジーナとぼく以外にも、アストロファージ^E発電^Mのトラン、温室効果制御のテレサ、自然酪農を復活させたアビー、〈コンソーシアム〉を率いるハリソ

ン……。残念ながらクラス全員がいまでも健在というわけじゃない。ぼくらはきびしい時代に生きている。それでもみんな、グレース先生の「遺志」を継いでなんとか人類を立て直そうという一心で、それぞれの分野で必死に頑張ってきたんだ。

だからグレース先生が地球に凱旋すると知って、ぼくらがどれほど驚き、喜びに沸き立ったことか！ “タウベディア”に収録されていた先生の帰投^{R T B}に関する一連のメッセージ、なかでも、かつての教え子に宛てたあの特別なビデオ・レターは、ぼくらにとって最高のサプライズだった。

レジーナもまた、グレース先生の影響を受けて人生を決めたひとりにちがいない。

彼女はもしかすると、ビートルズだけがもどってきたことをいち早く不審に思ったのかもしれない。〈コンソーシアム〉さえ浮かれているなかで、冷静に〈ヘイル・メアリー〉の状態を把握しようとしたのだろう。しかし彼女の期待は完全に打ち砕かれた。光の波長は青い側じゃなくて、赤い側にズレていた。船は近づくどころか、遠ざかっていた。

彼女がこの大発見をなぜ自分の名前で大々的に公表しなかったのか、それはわからない。でも、きっと彼女は相当悩んだんだろう。自分の観測データの正当性は、彼女自身がいちばんよく知ってるはずだ。だからこそ、それが疑念を決定的なものにしてしまうのが――

自分が最大の貢献者となってしまうのが、耐えられなかったのかもしれない。

それでも結局、彼女は科学者として誠実に、傍証を探した。そして見つかったグレース・メモが、彼女の希望にとどめを刺した形になった。観念した彼女は歴史の表舞台に立つことを選ばず、すべてを〈コンソーシアム〉に委ねたんだろう。

もしもレジーナの発見がなかったら——周囲の下馬評のとおりになへイル・メアリーへは消息不明扱いになっていたかもしれない。それにくらべれば全然ましなのはたしかだ。少なくとも船は生きていて、四秒サイクルで出力を制御しながらエリダニ40に向かっている。グレース先生の意図にしたがって。だから客観的には決して悪いニュースではないし、実際に世間の大多数は先生の決断を英雄的行動として受け止めている。

でも、彼女の落胆は痛いほどわかる。

だって、ぼくだってそうだったんだ。

先生が帰ってくるはずだった来年の春が、待ち遠しくてしかたがなかった。伝えたいことも聞きたいことも、山ほどあった。

だから、先生が帰ってこないとき、ぼくもほんとうにショックだった。ショック

クすぎて、滅菌したばかりのピペットチップの箱をぜんぶひっくり返してラボでわんわん泣いた。

ファイル名に文句をいえる筋合いはない。だって“タウペディア”のほかのファイル群はきちんと整頓され、インデックスまでついていたからだ。よっぽどの状況だったってことは容易に推測できる。

先生はきつと、地球に向かうとする途中でエリディアンの友だちの危機を知ったんだろう。グレース・メモのタイムスタンプを見るかぎり、軌道力学的にいつて後もどりできるタイミングぎりぎりだったにちがいない。ビートルズはいつでも放出できるようにスタンバってて、RAIDアレイへのレイトアクセスは無理だったのかもしれない。急いでメッセージを書いてその辺のUSBメモリに保存し、ダクトテープでビートルズの中に貼り付けて、地球に向けて飛ばしてから、友だちを助けにもどったんだろう。

グレース先生のやったことは、正しい。圧倒的に正しい。

先生は、友だちと世界とを同時に救ってのけた。

ぼくだったら、とっさにそんな判断ができるだろうか？ うじうじと悩んでいるあいだに、友だちを助けるチャンスもビートルズを放出するチャンスも失ってしまうんじゃないか？ そう、まるで、いまのぼくみたいに。

* * *

「だからなのよ。……だからわたしは志願したの。ラテラルパス・ミッションに」

レジーナの声ではつとわれに返る。なさけなく感傷にひたっていたぼくをよそに、彼女の声はもう、持ちまえの冷静さを取りもどしていた。

ラテラル
横向きのパス。

劣勢のアメフトチームによる起死回生の大遠投パス、それがヘイル・メアリーだ。でもそんなプレーは文字通り、神頼みのやけくそパスだ。本来、クォーターバックは多彩なパスプレーを繰り出す。横向きのパスなら、試合中に何回だって投げていい。

タウ・セチに挑む一か八かのヘイル・メアリーじゃなくて、横にいる“隣人”に向けたパス。エリダニ40に向けて何度でも投げて、ともにゲームをつづけていくためのパス。人々の新しい恒星間往還ミッション、ラテラルパスだ。ほんとうはもっと長くて堅苦しい名

前なんだけど、ヘイル・メアリーのアメフト趣味にあやかっ**て**ばくらは勝手にそう呼んでいた。

彼女はひと息ついて、つづける。「太陽光度の情報がエリダニに届くのは、いまから一六年後。その頃にはたぶんグレース先生は、五十代になっているはず」

「うん。エリドは高重力だし、さすがに身体にもガタが来ているだろうな」とぼくはいう。「そうね。だから、もうもどってくる気はないんだと思う」彼女の横顔が、シルエットだけ見える。「電波でもこちらの情報をエリダニに向けて送信しつづけているけど、やっぱり一六年かかるし、エリドの濃く濁った大気の底に届くかどうかはわからない」

「逆もおなじだな。仮に先生がエリダニからこちらに情報を送ってくるにしても、十六年だ」実際、地球から見たエリダニ40の光度はまだ回復していない。

「長すぎるのよ。わたしはいまから何十年なんて待てない」と彼女はいった。「だから、グレース先生に直接会いに行く。先生が元気でいるうちに」

レジーナの声には、たしかな熱量があった。

「わたしが見つけたいまましい赤方偏移を、追いかけて、可能な限り、打ち消してやる。それがわたしのほんとうの志願理由」

たぶん、近いことを考えたやつらが世界中にたくさんいたんだと思う。ただし、彼女よりはもうちょっと実務的な理由で。

ビートルズのデータから紐解くかぎり、人類とエリディアンは今後宇宙の友人としてうまくやっていけそうな気がする。だが往復三五年という距離はあまりにじれったい。グレース先生に通訳をやってもらえるうちに人類が訪問しないと、いろいろとまずい。少なくともぼくは、先生なしにまったくうまくいく気がしない。

早く行動すればするほど、お手玉がもらえる——早押しクイズで学んだ、宇宙の普遍的真理だ。先生に残された時間はかぎられている。ぼくらはエリディアンより寿命が短くて、せっかちで、衝動的な種属だ。それに今を逃したら、人類は外宇宙より内政を優先するだろう。

だから、いまから使節団を複数回に分けてエリドに送る——ラテラルパス・ミッションだ。そのための船のパーツの一部が、二週間後、この浜辺からはじめて打ち上げられる。八カ月かかる軌道上組立の最初の一步だ。

レジーナはみごと、第一便のメインクルーに選ばれた。ぼくはといえば、バックアップ

クルーだ。そして第一便が出発したら、すぐさま今度は第一便のバックアップクルーが第二便のメインクルーになって、出発準備にかかる。太陽系とエリダニ40との位置関係から、出発のチャンスは年に一回。つまり、ぼくもレジーナの一年後には、彼女たちを追いかけていくことになる。

いまのぼくはもう、グレース・メモを見て大人げなく泣いたりしない。むしろ、先生的確な判断と友情を誇りに思っている。先生がエリドを訪れた最初の人類でよかったと、心から感じている。

でもレジーナはきつと人一倍、この使節団にかける思いが強いんだ。

彼女は赤方偏移の第一発見者だ。だからこそ、その存在が許せないんだろう。自分の手で物理的にそれを打ち消したい気持ちはすごくわかるし、彼女にはその権利があつてしかるべきだ。

それに彼女がぼくにこの話を打ち明けてくれたことは、ちよつとうれしかつたんだ。ともにグレース先生に学んだ同志として、だ。レジーナの成果はもっと広く知られるべきだけど、いまは彼女の気持ちを尊重して、ぼくらの秘密にしておこうと思う。

「ぼくもだいたいそんなところだ。先生に会いにいく最後のチャンスだと思ってね。——
その、さっきはごめん。無神経なことをいった」

すでにぼくらは、人生の折り返し地点にいる。船内時間は片道四年半だけど、地球に残していく家族や友人たちには三五年間の留守番を頼むことになる。それも覚悟のうえだ。長期昏睡は使わない。危険な賭けだ、とヤオ船長とイリュヒナが身をもつて教えてくれた。それにこれはもう特攻ミッションじゃない。投げたパスはもどってくる。

「ぼくも先生の教え子だから、きみの落胆も覚悟もすぐく共感する。でも、その情熱には負けたよ。強いな、きみは」ぼくは素直に彼女のタフさを称賛する。持てる科学のすべてをつぎ込んで先生に迫いつこうとしている彼女の意地を。「きみは選ばれるべくして選ばれたんだと思う。まぐれで採用されたぼくとは大違いだ」

彼女の視線がこつちを向いたように感じた。

「いまさら、なにを謙遜してるの。いまや、あなたは世界の比較宇宙生物学を牽引している。タウメーバの第一人者でしょう。胸を張ってよ」

それは買いかぶりすぎだ。比較宇宙生物学は生まれたばかりの新しい分野だから、ぼくみたいな平凡な研究員でも世界の最先端で仕事ができるってだけだ。

「オーケイ。ありがとう、レジーナ」とぼくは肩をすくめる。「まあ、ぼくの数少ない武

器だしね。これがなくなったら、あとはマッケンチーズづくりくらいしかやれることがなくなってしまう」マッケンチーズは、ぼくがつかれる唯一の料理だ。マカロニもチーズも、いまはまだ代替品だけど。

「あなた、なんだかグレース先生に似てきてるわよ」とレジーナが苦笑いする。

「ワオ。どのへんが?」まんざらでもない。いや、正直にいおう。めっちゃめっちゃうれしい。先生はぼくのヒーローであり、憧れだったんだ。にやつきがおさえられない。「顔? ……じゃないよね」

「しゃべり方とか、ものの考え方とかね。タウメーバと毎日じゃれ合っているとこういう感じになるのかしら?」

「培養のたびに、ぼくのかわいいタウメーバたちに声をかけているからね。オーケイ、みんな、きょうは分裂してみよう! いちばん早く増えたチームがお手玉獲得だ! ってね」グレース先生の口調をまねてみる。……おっと、スベったかな。レジーナの表情はまだよく見えない。でも、ちよつと笑ったような気がする。

それにぼくが日々こんな感じでタウメーバを扱っているのは、ほんとうのことなんだ。

先生の科学の授業で感じたワクワクに突き動かされて、ぼくはいま、ここにいるんだから。レジーナもきつと、そうなんだと思う。

「——先生はずっと、ぼくの理想だった。かなり影響されてるのは否定できないね」ぼくは肩をすくめる。

「じゃあ、あなたもきつと、よい先生になれるわね」

「そうかな」

「わたしたちは、グレース先生のことを直接覚えている最後の世代よ。それを次の世代に伝えていくのも、わたしたちの仕事。先生の、ものの考え方も含めて、ね」

レジーナはそういうと、天文薄明が終わろうとしている東の空をだまって見すえた。大西洋と空の境界がうすぼんやりと白みを帯び、季節外れの春の星座は輝きを失いはじめていた。

まもなく、地球にいちばん近い恒星が、今日も水平線の向こうから昇ってくるだろう。九七パーセントまで復活した白色光が、この小さなバイオスフィアに満ちるだろう。

不意に頭の中で、穏やかなアコギのイントロが流れた。四機のビートルズのうち、《ジョージ》の送信データのプリアンブルに仕込まれていた、百年近くも昔の曲だ。設計者のいたずらだろうな。人類が、データ受信のたびに飽きるほど聴かされたフレーズ。かつて、宇宙のどこかの“隣人”に向けて、ボイジャー探査機のゴールドデンレコードに収録

されるはずだったナンバー。

「^{ヒア・カムズ・ザ・サン}太陽が昇ってくる」口の中でそつとつぶやく。^{イツ・オールライト}「もう、大丈夫だ」

人類とぼくらの太陽^{ソル}はもう、きつと大丈夫です、ライランド・グレース先生。

もしかすると〈ジョージ〉からのブロードキャストは、遠くエリドにも届いてるのかもしれない。それでも、ぼくらはそれを直接会って伝えたいんだ。先生とその友、ロッキーに。

風が風呂、気の早い海鳥の群れが、遠くでにぎやかに鳴きはじめる。長く暗い夜がようやく明けようとしているのを、全身で感じる。

いつか、和音と音符で話す^エぼくらの^デ最初の^イ隣人^ンたちにこの曲を聴かせたら、いまのこの感覚をわかってもらえるだろうか。

そんなことをぼくは徹夜明けの頭で、ぼんやりと考えた。

(了)